

心理学的「知恵」概念の検討

—機能的側面と構造的側面に着目して—

春日 彩花

第1章 知恵の概念研究の概要と課題

世界的に高齢化が進行する中、一般的に高齢期のポジティブな側面として理解されていた「知恵 (wisdom)」という概念が心理学の分野で取り上げられ、主に欧米諸国を中心に研究が進められてきた。「知恵がある」とは、どのようなことを意味するのだろうか。心理学的研究において、知恵は、歴史的文献や一般の人々の理解、心理学的な理論に基づき、様々な観点から定義されている。長年の研究の蓄積により、それらの定義に重なり合う部分もあることが分かっているが、知恵は依然として研究者・グループごとに解釈され、それぞれの観点から研究が進められているのが現状である。したがって、まずはこれまでに見いだされてきた定義を整理し、「知恵」という概念を理解するための枠組みを、改めて検討する必要があると考えた。また、従来の知恵研究は主に海外で行われていたことから、これまでに開発された測定法や尺度も、海外の知恵観を反映したものとなっている。一方で、「知恵がある人」の捉え方には文化差があることが指摘されている。つまり、海外で作成された測定法や尺度では、必ずしも日本人が「知恵がある」と評価する際に重視する側面を、捉えられないということである。したがって、日本人にとっての知恵の概念の特徴を明らかにし、その内容を反映した測定方法を開発する必要があると考えられる。以上より、本研究は、「知恵」という概念の構造を明らかにすることを目的とした。そのために、先行研究の定義を分類して、「知恵がある」ということを包括的に理解するための枠組みを検討し(研究1)、日本人における「知恵」の構成要素を調べるとともに(研究2)、研究1の枠組みと研究2の結果に基づいて、日本人にとっての「知恵」を反映した測定方法を開発することとした(研究3)。

第2章 知恵という概念の包括的枠組みの構築 (研究1)

研究1では、「知恵がある」ということを包括的に理解するための枠組みを検討することを目的とした。先行研究にみられる主な知恵の定義を、Takahashi and Overton(2002, 2005)の提案した「包括的知恵理論」に基づいて分類した。そして、知恵を「機能的側面・構造的側面」の枠組みで解釈すべきであると論じた。「機能的側面」とは、知恵の働きに関する側面で、知恵に関わる実利的能力のことである(e.g. 知識の有効活用力、推論能力)。また「構造的側面」は、知恵の心理構造に関する側面で、知恵に関わる心理的要素、およびそれらの要素を統合した心理体系のことである(e.g. 認知・内省・感情的特性の統合、心理的成熟)。この枠組みでは、知恵の構造的側面が、機能的側面を下支えするという関係性が想定されていた。つまり、この枠組みに基づけば、「知恵がある」と評価される人は、成熟した心理体系を有しており(構造的側面)、なおかつそれが実利的な能力の発揮に関わることによって(機能的側面)、「知恵がある」と見なされるのだと説明される。この枠組みは、「知恵がある」と評される状態を、より詳細に検討するために有効であると考えられる。

第3章 日本人における「知恵」—中高年世代を対象としたインタビュー調査— (研究2)

研究2では、日本人にとっての「知恵」の構成要素を明らかにすることを目的とした。中高年世代を対象として、「知恵がある」という評価に関わる側面を問う半構造化インタビューを行った。その結果、【具体的に問題を操作する能力】(宣言的知識、手続き的知識、段取り力、創意工夫する能力、リーダーシップ、

対応の賢明さ、やり遂げる力、優れた対人技能)、【方針を設定する力】(思慮深さ、大局観、直観性)、【内的可変性】(経験の豊富さ、知的探求心、内省的態度、思考の柔軟性)、【周囲との調和性】(規範に基づいた態度、他者に対する思いやり、「おかげ」の意識、利他的な態度、謙虚な態度)、【信念に基づく生き方】(強い意志に基づく実行力、人生の指針の確信)という 5 つのカテゴリーが見いだされた。これらの要素は、機能的側面と構造的側面の枠組みで説明できると考えられた。また、欧米圏の研究と比較すると、日本人にとっての知恵には、調和性を重視する特徴(規範に基づいた態度、「おかげ」の意識、謙虚な態度)と、自分の生き方を見定めて実行する力を重視する特徴(やり遂げる力、強い意志に基づく実行力、人生の指針の確信)があることが示唆された。

第 4 章 包括的枠組みに基づいた尺度の開発 (研究 3)

研究 3 では、日本人向けの知恵尺度を作成し、その構造を明らかにすることを目的とした。研究 1 の枠組みに基づいて、知恵の機能的側面との関連を意識した構造的側面の尺度を作成することができるのではないかと考え、研究 2 で見いだされた日本人の知恵観をもとに、知恵の構造的側面を評価するための試作版知恵尺度(全 90 項目)を作成した。また、知恵と関連していることが期待される心理的 well-being、および知恵と無関係であるべきと考えられる社会的望ましき反応尺度も同時に実施し、試作版知恵尺度との関連を検討した。因子分析の結果、日本人向け知恵尺度は<調和的態度><本質を見抜く力><大局的な目標><社会貢献意思><思考の深さ><動機付け>の 6 つの因子により構成されたと考えられた。また、6 つの 1 次因子を、【自己と他者に関する要素】(調和的態度、社会貢献意思、思考の深さ)と【自己に関する要素】(本質を見抜く力、大局的な目標、動機付け)の 2 つの 2 次因子にまとめることができると判断された。これらはそれぞれ、研究 2 で見いだされた、調和性を重視する特徴と、自分の生き方を見定めて実行する力を重視する特徴を、反映したものであった。また、このように 2 次因子で説明することは、機能的側面と構造的側面の関係を解釈する際にも有効である可能性が示された。今後、機能的側面と構造的側面の間の関係について、さらに実証的に検討していく必要がある。さらに、今回作成した知恵尺度は、仮説通り、心理的 well-being との間に一貫して正の関連が認められた。しかし、従来関連すべきでないと言われてきた社会的望ましきとの間にも弱～中程度の正の相関を示した。したがって、日本人にとっての「知恵」に、社会的に望ましい生き方をすることが含まれている可能性があることが示唆された。

第 5 章 総合考察

本論文の目的は、「知恵」という概念の構造を明らかにすることであった。まず研究 1 では、先行研究における知恵の定義を分類し、知恵を、機能的側面と構造的側面という枠組みで包括的に解釈すべきであると論じた。次に研究 2 で、日本人の知恵の概念を探るインタビュー調査を実施し、日本人にとっての知恵には、調和性を重視する特徴と、自分の生き方を見定めて実行する力を重視する特徴があることを明らかにした。最後に、研究 3 では、研究 1 の枠組みと研究 2 の結果を踏まえて、知恵の構造的側面に関する日本人向けの知恵尺度を作成し、項目の選定を行うとともに、日本人の知恵の概念構造とその特徴について検討した。以上を踏まえ、知恵とは、人生の問題に取り組むために必要な側面であり、成熟した心理構造(構造的側面)と、それに下支えされた優れた能力(機能的側面)から成るものであると考えた。また、知恵の普遍的な構造は、機能的側面と構造的側面の枠組みで説明できるが、その具体的な内容は各文化の価値観を反映していることが確認された。知恵について研究するにあたっては、機能的側面と構造的側面の枠組みに基づき、各文化の特徴を踏まえたうえで研究を進めていくことが有効であると考えられる。(臨床死生学・老年行動学)